

# ゴリンジ

## CONTENTS

### EXAMINATION

子ども文化におけるミニチュア志向 .....4 畑中圭一  
 「ガラスの仮面」小論―美内すずえ氏の価値観について .....19 細江光  
 〈連載〉マンガ表現試論⑦ .....34 小山昌宏  
 「風の谷のナウシカ」、その未来への透図 .....58 渡辺泰  
 〈連載〉戦後劇場アニメ公開史 ⑩ .....66 五味洋子  
 1957 (昭和32)年 .....72 上笙一郎  
 〈連載〉アニメーション備忘録② .....84 竹内オサム  
 第11回広島アニメフェスについて .....95 丸山昭  
 〈連載〉児童出版美術 游々④ .....128 聞き手・高橋孝二郎  
 近代最初の挿絵研究文献―『孤雁挿画集 壺巻』― .....136 高取英  
 〈連載〉変容するマンガたち⑤ 番外篇 .....142 ペコロス  
 「正チャンの冒険」余談 .....144 F・M・ロッカー

### MEMORY

〈連載〉児童雑誌編集者として・思い出すことども ⑩ .....95 丸山昭  
 U・マイアって誰? ―水野英子さんに聞く .....128 聞き手・高橋孝二郎  
 現場からの報告― .....136 高取英

### OBSERVATION

〈連載〉雑誌「少年」のライバルたち .....142 吉川真美子  
 「少年少女 冒険王」のぼうけん 承・黄金期篇 .....144 F・M・ロッカー  
 データで読む「冒険王」史④ .....176 村上知彦

### ESSAY REVIEW

繰り返して読む、「読む」ことの幸せ .....122 吉川真美子  
 風にふかれて児童文化論 .....54 川勝泰介  
 日々是まんが .....176 村上知彦  
 〈マンガ〉ペコロス劇場 .....142 ペコロス

### INFORMATION

執筆者紹介 82 ・ 近隣大学卒論リスト 79 ・ オサムの本 94 ・ 童謡詩人研究 88  
 18号の江刺論文の訂正 178 ・ マンガのアプレゲール 95 ・ チクマ秀版社 71  
 酒井七馬伝 141 ・ 手塚治虫とボク 141 ・ 編集後記 183



表紙装丁・おさたけし

BIRANNZI

2007・4・3

OSAMU TAKEUCHI



# 「正チャンの冒険」余談

竹内オサム



正チャンの其後 大15

## ◆「正チャンの冒険」論との関わり

3月末発行の日本マンガ学会の紀要『マンガ研究』11号に、大正末に連載開始された絵物語「正チャンの冒険」について論文を書いた。この『ピランジ』19号ができあがっている頃には、すでに学会員の手許に届いているはず。正式には、「正チャンの冒険」の変容過程―初出作品の検討と単行本化の問題―というタイトルの投稿論文だが、「正チャンの冒険」の初出と単行本化作品とを詳細に検討しておいた。この文章は、いわばその補足にあたる。

言いわけめくが、本務校での入試や雑務が重なり（地方入試で1週間の泊まり込みはさすがにこたえた）、また『ピランジ』の編集も加わって、まとまった時間がいま取れずにいる。紀要の方では同作品の

内容を詳細に論じたし、以前出した本『子どもマンガの巨人たち』（95 三一書房）では、やはり同作品に寄せられた子ども投書を分析したので、本来なら今回は、作者の側に焦点をあて同作品を再検討したいところなのだが、なにせいま言ったように時間に余裕がない。

そこで急遽変更。『マンガ研究』11号で書き残したことを、忘れないうちにメモしておくことにした。紙数の関係で紀要に書き切れなかったことを、何とか形にしておこうと思いついたのだ。

作品の中身はほとんど忘れられていく。あるいは自分自身一度読んだものでも、時間が経つと記憶から遠のいてしまう。「正チャンの冒険」もそうなるにちがいない。多数の話が次々と展開していくシリー

ズで、まだ自分自身のなかでは印象として残っているものの、今後細部の記憶がどうなるかは、わかっただものではない。いま覚えていた部分だけでもメモしておく方が賢明な気がするので、今回は変則的な書き方をすることにした。

できれば、『マンガ研究』11号の掲載論文とあわせてお読みいただければ、というのが正直な気持ち。紀要原稿の羅列的な補足ということなので、先の紀要の内容を理解しておかないと、実際何のことかわからないのではという危惧もある。でも、まあ、しかたがない。こうした書き散らしも今後研究する人の何かの役には立つのではないか、かつてにそう思いこむことにして、以下気づいたことを書きつらねてみる。としたい。

## ◆「正チャンの冒険」とは

とは言っても、「正チャンの冒険」という作品自体、初めてその名を聞く人がいるかもしれない。

「正チャンの冒険」とは、大正12（1923）年10月20日より『東京朝日新聞』に長期の連載となったマンガ（絵物語）である。『大阪朝日新聞』には、少し遅れて同年11月4日から連載開始となったもの。

スキー帽を被った少年が、リスをお供に冒険をする物語である。『朝日新聞』自体が全国に販路を広げようとした時期に新聞連載されたので、当時かなり多くの子どもに愛読された。

ただし、『朝日新聞』が連載の最初というわけではない。それ以前に朝日新聞社発行の日刊紙『アサヒグラフ』に大正12年1月25日より連載が始まっていて、関東大震災を機に『朝日新聞』に発表の場を移したという作品なのだ。

案は小星こと織田信恒が、絵は東風人こと樺島勝一が担当した。話はいま言ったように、洋服姿に帽子をかぶった少年が活躍するヒーローもので、ファンタジー性豊かな内容となっている。のち昭和に入つて吹き出しを用いた子どもマンガが数多く現れるが、その先駆とみなせる。ただし若い人には馴染みのない作品。戦後のマンガに慣れっこになっている人には、アピールしにくいかもしれない。しかしマンガ史を考える上では避けて通れないマンガであることは事実。また実際に当時の単行本などは今日振り返ってみてもなかなか美しく、数年前には東京の通信博物館で「正チャンの冒険」の回顧展まで開かれたくらいなのだ。

前掲『マンガ研究』11号の拙稿では、『アサヒグラフ』『朝日新聞』の連載、連載当時出版された単行本と戦後の単行本を含めて、その推移のありさまを検討した。初出作品から単行本へという変化と、ファンタジーというジャンルとスタイルの変化とをクロスさせて考察、作者の創作意識を明らかにする

お伽正チャンの冒険・五の巻



とともに、マンガ史のなかでの位置づけを行った。結果、「正チャンの冒険」という絵物語は、異世界ファンタジーの要素に加えSF的発想の物語も内包。また、ファンタジー世界の背後に、神秘の空間としての「森」が強く意識されていたことがわかった。また表現のスタイルの面

では、連載の初期に大きな変化を示し、海外のマンガ形式の移入という時代相を示していた。さらに残忍な描写のある点も指摘しておいた。

これまで筆者は本誌『ビランジ』13号から「変容するマンガたち」の連載を始めているが、前掲『マンガ研究』掲載論文はその延長線にあるものと位置づけられる。この文章もそうした従来の関心に立つものと受け取っていただきたい。

#### ◆『朝日新聞』連載へのお知らせ

紀要では紙数の関係から省略したが、まず『東京朝日新聞』に連載が移る際に出された案内広告を、そのまま引用しておく。「正チャンの冒険」は大正12年の10月20日より同紙に移るが、その前日の紹介記事である。

少年少女のみなさんへ

◇おなじみの「正チャンの冒険」は明日の本紙から活躍します◇

十八日朝刊の社告のとほり今まで御愛読をねがひましたアサヒ・グラフは巳むを得ず一時休刊することになりました。然しその創刊以来コード

ことになる。

#### ◆キャラクターの成り立ち・正チャン帽

次にキャラクターについて（これから話はあちこちに飛ぶのでお許しを）。

前掲論文では紙数の関係で、盛り込めないことが多々あった。細かいことながら、案外この物語を理解する上に重要なこともあるので、次にはキャラクター、とりわけ視覚的印象にまつわることを書いておくことにする。

『アサヒグラフ』は一部の家庭でしか読まれていなかった。もともとこのシリーズは、『アサヒグラフ』紙上でも無記名の連載だったが、新聞に移ったからもしばらくは無記名で連載が続けられている。今日のような作者としての意識は、当時二人には乏しかったのかもしれない。「子どもページ」全体を彼らは担当していたし、なおいつそう、そういう意識をいっていたのだと思う。新聞社内部の人間の手による作品でもあったし。

作者の名が記されるようになるのは、新聞連載も半年近くたってから、大正13年3月1日の紙面よりである（「シロイカラス」第1回め）。「小星作・東風人画」とタイトルの左端に小さく手書きで記されるようになり、以降ずっとこの記名が続いていく

まずおなじみの正チャン帽だが、日刊『アサヒグラフ』連載の初めの頃は、のちに知られるような帽子を被ってはいなかった。はじめ正チャンは学生服姿で登場し、それにあわせて帽子も学生帽が描かれている。顔つきもなにやら大人びている。その正チャンがぼんぼりのついたスキー帽を被るのは、『アサヒグラフ』の連載の途中から。第4話（といってこの「話」は便宜上の区切り。T12・02・14～02・24）で、正チャンはスキー帽を身につけることになる。スキーを素材にした話なのでスキー帽を被る、それがスタイルとしておもしろいので、以降正チャンはスキー帽というスタイルを継続、そのイメージ

が定着していくことになっていった。

ちなみに、「少年小説大系」の別巻『少年漫画集』（竹内オサム責任編集 三一書房）には、この単行本の第1巻を再録してある。そこに「ウサギ」のタイトルで収録されている作品が第4話にあたる。ただし、『アサヒグラフ』紙上のものを描き変えているので、話の展開は同じでありながら、絵柄は変わっている点に注意されたい。

以降正チヤンは、このスキー帽をトレードマークにして、スーパーヒーローものの定型をまもり、智恵と勇気のヒーローとして活躍していく。ただし、いつもこの帽子を被っていたというわけではない。ちなみに、『朝日新聞』に連載が移ったときは、関東大震災に被災したところから始まるが、正チヤン帽ではないし、新聞連載のなかでもときおり他の帽子に被りかえたりしている。

連載マンガは、こうした主人公のコスチュームで記憶される場合が多い。主人公のキャラクター設定の象徴として、こうした小道具が子どもの心に刻印されるのだ。マンガのキャラクターがいかに視覚に頼って成立しているか、これはそのひとつの証拠となりえるだろう。

それまで凸坊とか漫画太郎とか、突飛なネーミングの主人公が多かったところに、身近かでニュートラルな名がつけられた。さらにそれが、「匿名性をもつ固有名詞」であると言うのだ。この「匿名性をもつ固有名詞」という言い方は理解しにくいかもしれないが、これは他のキャラクターと対比してみればはつきりする。「正チヤンの冒険」には正チヤンに似た名の女性が登場する。「正子サン」（まさこさん）というキャラクターがそれで、姿も洋服に黒いソックス、それにハイカラな帽子をかぶっている。「ツミクサ」の巻（『東京朝日新聞』 T14・5・16〜T14・5・31）でのこと。

正子サンは花摘みに野にでたところ怪しげな船頭にさらわれるが、洋館の女が発明したクスリの力で正チヤンによって助けられる。名は似ているが正チヤンのようなヒーロー（ヒロイン）性には乏しい。ところでこの「正子」という名は、「正チヤン」と比べるとあまりに具体的な印象を与える。「正チヤン」が正一でもなく正太郎でもないのは、身近かで具体的な名をイメージさせながらも、それらを総合した抽象性に立脚しているからだ。この点は、「正」

#### ◆正チヤンという名

キャラクター設定に関わって、名前についてもこだわったおこう。「正チヤンの冒険」は正チヤンという少年の冒険譚だが、この正チヤンという名はいかにもこの物語の性格を象徴している。実際には大正の元号から取られたものだが、正義のヒーローという点では、正義の「正」と受けとれなくもない。前掲『マンガ研究』11号掲載の論文では、ごく普通の命名法について次のように書いておいた。

子どもたちが共感をよせた理由のひとつに、「正チヤン」という平易の名づけが関わっていたであろうことは容易に想像できる。すぐ近くにいる子どもをイメージさせたわけだが、同時に「正チヤン」は、正一でも正太郎でも正三でもなく、そのいずれにも当てはまるという匿名性を、あわせ持っていたという点を見逃してはならない。いわば正チヤンという名は、「匿名性をもつ固有名詞」と言えようか。それが、読者に等身大のキャラクターと印象づける理由のひとつとなっていたのである。

が大正の正にもとづきながらも、「正義」「正直」の正をもイメージさせる自在さに相通じる。

#### ◆リスの家族

正チヤンのキャラクターに関連して、お供であるリスについてもふれておこう。リスは当時ペットとして飼うには珍しかった時代。そのため読者の注目を集めた。ヒーローがお供を従えての活躍は、桃太郎でもおなじみのパターンだが、リスも含めて西洋趣味である点が、この物語の場合特異に映った。

ところでリスには家族がいる。物語のなかでそう描かれている。正チヤンは身寄りが少なく、朝日新聞社の記者が小父さんであるのと対象的なのである。登場するのは「リスノオカアサン」（『東京朝日新聞』 T13・4・24〜T13・5・8）の巻で、リスのお母さんは実にしっかりしている。

お供のリスがある日夢を見る、母が木から落ちたという夢を。リスは心配になり母を訪ねようとするが、電報が届き迎えの自動車までやってくる。正チヤンとリスはそれに乗り込むがなぜか意識をなくしてしまう。気がつくとも魔女のいる古城へ。コンドルの餌にされかかると危機一発で脱出。傷を直してやっ

たコンドルを手なづけ、その背に乗ってリスのお母さんのもとへ、再会をはたすという筋書きだ。リスはホームシックに陥るのだが、母は正ちゃんのお供をずっと続けるように子を諭すのだ。

『子どもマンガの巨人たち』で述べたことだが、当時の読者は正ちゃんをリスを実際に生きている存在であるかのように声援を送った。素朴な時代だったからと言えはそれまでだが、現在でも映画寅さんシリーズの寅次郎のように、実在感をもつ大衆のヒーローは存在するものだ。やはりそれだけ、正ちゃんトリスはキャラクターとして、生き生きしていたのだと思う。毎日家庭に送り届けられる新聞というメディアに載っていたので、日々の日常性がかもし出された点も見逃せない。

#### ◆変わった素材

物語には変わった素材も描かれている。子どもマンガであるのに。

作者である小星こと織田信恒は、朝日新聞社の嘱託として入社し、『アサヒグラフ』の子ども欄を担当したとき、きわめて教育的な姿勢でこの物語を始めたという。

広義の教育性に満ちているのだ。雑誌掲載のマンガ、単行本形式のマンガ等、他のメディアに掲載されたマンガと比較してみると、こうした点においても、新聞掲載のマンガの性格がはつきりしてくる。

#### ◆小説版「正ちゃんの冒険」

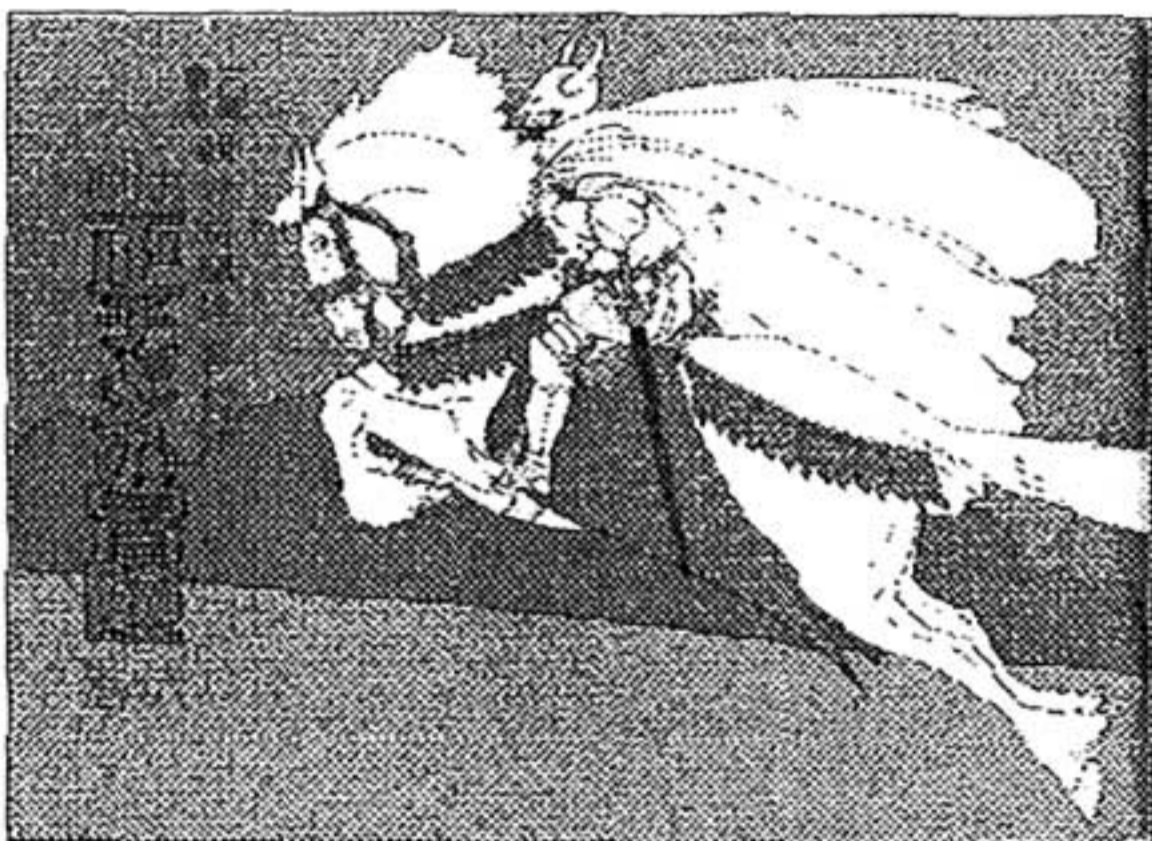
「正ちゃんの冒険」は吹き出しと説明文を併記したマンガ（絵物語）だったが、絵のない「正ちゃんの冒険」Ⅱ小説も当時書かれたらしい。織田の手になる創作童話集『正ちゃんトリス』（大正15年 金尾文淵堂）が出版されたと、入江正彦は「路地裏にいた正ちゃん」（『近代庶民生活誌』18 三一書房 平成10）のなかでふれている。実物を確かめられずにいるのでその詳細は不明だが、実際書かれたのであるとすれば興味深い。連載作品の焼き直しなのか、それとも新しい創作なのか…。

おもしろいことに同じ文章のなかで入江は、同単行本所収の小説「鉄の小箱」に言及している。当時ラジオで放送されたものだという。しかし、入江が言うラジオ放送の時期とちょうど時期をあわせて、新聞の方では似たタイトルの作品「テツノハコ」（T14・08・27～T14・09・17）がマンガで描かれ

それは物語全般に言えることだが、素材面でもいくつかそうした社会性のある話題が垣間見える。たとえば、連載間もない日刊『アサヒグラフ』紙上の「シンブン」（T12・4・22～T12・5・4）の巻では、正ちゃんが新聞を発行しようとする懸命な姿が描かれる。リスは取材を敢行。読者である子どもたちは、こうした親しみのあるキャラクターを通じて、新聞という遠いメディアを身近に感じられるように仕向けられる。

『東京朝日新聞』掲載の「ナツヤスミ」（T14・6・30～T14・7・11）では、裁判の模様が描かれる。正ちゃんは汽車の旅で海辺へ。タコが化した女に誘われ海のなかに引きずり込まれることに。そして、生物たちに裁判にかけられてしまうのだ。また、「アタラシイセカイ」（T13・5・20～T13・6・3）ではユートピア社会を描写。火星と間違えて地球に来た木星人たちが、正ちゃんたちをつれ本来の目的地である火星に旅するという物語だが、争いのない火星の国が賛美されている。

物語全体から言えば数は少ないのだが、こうした社会の制度や仕組みを、子どもマンガのなかに持ち込んでいるのは、いかにも新聞連載のマンガらしい。



お値正ちゃんの冒険・六の巻 大14

ているのだ。この点は入江も知らなかったようだ。

新聞掲載の「テツノハコ」の方は、アライジンのランプをヒントにしたかのような作品。中近東が舞台のよう。ある国の王様が病気がなので、助けて欲しいと正ちゃんを訪ねてくる。正ちゃんはコイを取ってくるようにと網を

渡されるが、池で鉄の箱をすくいあげる。箱のなかからは煙が出て、川の主である魔神が登場。それをつかかきつけて、料理人が毒を少しずつ盛っていたため王が病気になるのだと判明するというもの。

実際に放送されたものが、同様のストーリーをもつものなのかどうかは不明。また「正ちゃんの冒険」はアニメーションにもなっているが、それとの関連もわからない。今後研究が進めばさまざまなこ

とが判ってくることだろうが、いまは周辺の事実のみを記すにとどめておかねばならない。

ともあれ、「正チャンの冒険」は小説形式で存在する。単行本ではなく新聞の連載においても、「すゞ蟲」(T13・8・21〜T13・8・28)なる小説が連載されているのだ。

小説「すゞ蟲」では、「東風人の小父さんが御用で一寸お留守ですからそのひまに絵無しでお話を一ツ致しませう」と1回めの頭でことわり、演劇形式の物語が展開。すゞ蟲の国での音楽会を素材にしたこの物語では、最後まで虫のお姫様の死を告げて、悲しい結末で締めくくられる。そしてラストの回に、小星(織田信恒)が兵役にとられるため、休載となる旨が告げられている。◇おことはり 小星の小父さんが兵隊にゆくので留守番の正チャンとリスは暫く「冒険」を休みますが、そのかはり山田みのるの小父さんが、これから面白い絵ばなしをして下さいます。」と。

読者の投稿をもとにした作品づくりもおもしろい。「ユキオンナ」「フユトハル」「コセンジヨウ」「アメヤサン」など、大正14年初めに書かれた四作がそう。おそらくネタが切れたので募集したという

ただ、ここで補足しておきたいのは、吹き出しを

用いながらもコマの外に語り言葉を添える形式が、当時のもつとも斬新な表現形式ではなかったという事実である。それは、それ以前に吹き出しを用いたマンガが日本のメディアで使用されていたというところからも明らかだが、織田や樺島自身の仕事をみてもその点は理解しやすい。彼らは吹き出しのみを用いたマンガを、「正チャンの冒険」連載の同時期に別の作品として描いているのである。「正チャンの冒険」が連載された日刊『アサヒグラフ』にときおり掲載された桃太郎のシリーズ(T12・1・28より、毎回6コマ、無題、無記名)がそれで、無記名ながら画風等から織田と樺島の合作と判断できるものだ。桃太郎のシリーズが、いまで言うマンガの形式の作品であることには驚かされる。筆者自身、古い

『アサヒグラフ』をめくって、ヘーこんなものが当時連載されていたのかとびっくりしたくらいだ。「正チャンの冒険」がこの表現を用いずいまだ枠の外に説明文を併記していたのは、やはり絵物語の流行がずっと尾を引いていたためではなかったか。もともとコマの外に言葉を添える絵物語は、日本の語りものの伝統と対応していたにちがいない。

のではなく、子どもの発想を生かし、なおかつ子どもにも参加を促すことでよりいっそう物語との結びつきを図った戦略だと思われる。

この四作品のなかで、とりわけ「アメヤサン」(T14・4・5〜T14・4・15)は注意を引く。戦後に刊行された単行本に同作品を描き変えて収録しているものの、単行本には元の案を出した少年の名が記されていない。なぜなのかは不明だが、気になる点だ。

#### ◆表現のスタイル

「正チャンの冒険」は新しい形式のマンガをアピールした。これまでの説明文を横に添えただけの絵物語から、コマのなかに吹き出しを使ったマンガへの、橋渡しをした作品として。

ただし、実際はそう単純ではない。割りきれない部分をのこす。

スタイルの変遷については、前掲『マンガ研究』11号に比較的詳しく書いておいた。海外のマンガの影響を受けながらも、日本語の縦書きの習慣に影響されつつ、大きくコマの構成が変化したありさまを記録しておいた。

古くは説教や謡曲、のちの講談や浪曲、また映画の活弁等の語りの芸と。昭和初期の絵物語に加え、紙芝居にもそうした伝統は受けつがれ、戦後の山川惣治や小松崎茂の絵物語にその流れがたどりつく。

昭和初期、いわゆる絵物語形式のマンガ流行の一方で、映画のトーキー化という事態が加わる。映画が無声からトーキーに変わるのが昭和3(1928)年のこと。のち吹き出しマンガを流行させた田河水泡の「目玉のチビちゃん」(『少年倶楽部』)も同年に連載開始されている。「のらくろ」同様吹き出しを用いたマンガで、同時に映画のイメージを誌面に強烈に打ち出していたのは象徴的だ。

つまり、日本のマンガが絵物語形式から吹き出し中心のマンガに脱皮していくのが遅れた、大正末から昭和初期にその大きな変化が起こった、以上の背景には、語りものの伝統と映画のトーキー化、この二つの間の軋轢が背景にあったはず、そう考えるのだがどうだろう。

いずれにせよ、絵物語から吹き出し形式のマンガへの移行は、他のメディアや芸能までを視野に入れないと理解できない部分があるのはまちがいない。込みいったことを言うようだが、「正チャンの

「冒険」と先の桃太郎のシリーズとを比較すると、表現スタイルでは逆だが、素材の面では「正チャンの冒険」の方がよりモダンなのである。同じ作者のものと思われる桃太郎のシリーズは、日本的に過ぎてパツとした印象を与えないのだ。

以上、とりとめないが、「正チャンの冒険」を調べてみて、いまだ印象深い事例を羅列的にではあるが記してみた。キャラクター設定、名づけの意味、社会的素材、小説の存在、スタイルの特徴など、さらに考察してみたい要素は多岐にわたる。興味をもたれた方は、一度このマンガを入手されて考察を深めていただければと思う。

ちなみに「正チャンの冒険」は、ダイジェスト版が数年前に小学館クリエイティブから出版されたし、文中に記した『少年漫画集』には単行本の1巻を再録、ずっと以前ではあるがほるぷの絵本復刻シリーズにやはり単行本が数冊復刻されている。いま読んでも、なかなかおもしろいシリーズなので、是非手にしていただきたい。

## オサムの本



三一書房 2300円

子どもマンガの巨人たち

楽天から手塚治虫まで、子どもマンガの歴史を作った巨人たちの作品の軌跡を追う。新聞連載マンガや「少年倶楽部」掲載のマンガも一覧。

### [著書]

マンガと児童文学の〈あいだ〉	大日本図書	品切
手塚治虫論	平凡社	1860円
戦後マンガ50年史	筑摩書房	1400円
子どもマンガの巨人たち	三一書房	2300円
マンガの批評と研究+資料	私家版	1200円
漫画・まんが・マンガ	青弓社	1600円
児童文化と子ども学	久山社	1630円
絵本の表現	久山社	1630円
マンガ表現学入門	筑摩書房	1980円

### [編著]

少年漫画集	三一書房	品切
マンガ批評大系・全5巻(共編)	平凡社	品切
アニメへの変容(共編)	現代書館	2200円
現代漫画博物館(共編)	小学館	4200円

### [創作マンガ] (おさ・たけし名)

『なんて・ユータン』	私家版
『マグノリア』	青心社 1200円

ておくことにします。文体はとたんに変化いたします。

◇少し前のことになるが、竹内は、本誌『ピランジ』16号、18号に、伊藤剛氏の『テヅカ・イズ・デッド』で指摘された竹内批判への反論を載せた。16号では直接その点にふれ、18号ではその後の経緯にからめて思うところを執筆。その後肝心の伊藤氏から、自らのブログ「伊藤剛のトカトントンニズム」(06・09・29)で反応らしきものがあつたので、ここに記録しておく。

◇「竹内オサムさんなどは、制度的には『学者』ですが(同志社大学教授として高給を食んでおられます)、メンタリテイ的にはむしろ創作系同人マンガ家君です。から、このカテゴリでとらえておくのが適切だと思います。」との要約。つづけて、「彼はこの一年に二度、彼自身が発行している個人誌『ピランジ』で、テヅカイズに対して『批判』を展開していますが、およそまともに取り合えるような内容のものではないし、誰が読んでも支離滅裂なものなので放置しています。相手にするだけ時間の無駄です。彼の『自滅』につきあう必要はどこにもありません。」とまで宣言している。

◇大丈夫か……。これは子どものケンカではないのだ。こうした議論に勤務校など関係はないし、それに「メンタリテイ的にはむしろ創作系同人マンガ家君」というくだりなどは、一種の人格攻撃ではないのか。もし伊藤氏が「評論家」を名乗るのであれば、評論家として

の最低限のモラルを身につけていただきたいもの、そう切に願うばかりだ。

◆元に戻りましょう。

◆「『ピランジ』は、無料の冊子です。ただし、郵送料として、一冊につき郵送料二四〇円が必要。できれば郵便小為替で該当分の送料を、めんどろな場合は切手でもかまいません、編集部までお送り下さい。バックナンバーの紹介ページは今回省略しましたので、いま在庫のある号を、左記に記しておきます。

○在庫あり 10、12、13、15、17、18号

在庫のない号は、国会図書館、上野子ども図書館、現代マンガ図書館、大阪国際児童文学館、大阪府立図書館等で過去の号を閲覧して下さい。

◆また、『ピランジ』では原稿を募集しています。400字で四〇枚以内、ページ数で20枚以内。版下作成が原則です。20号の締め切りは、07年の8月5日。採否は竹内の判断によります。その点をご了解下さい。

ピランジ 19号

発行者 竹内オサム (〒)

発行年月日 2007年4月5日

印刷 ヤスダアーツ株式会社